

【 宮城県仙台市の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な仙台市方言の音声や文法を概観していきます。

Ⅰ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは簡単に言えば、単語の頭以外の位置にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になり、濁って聞こえることです。専門的に言えば、母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になることで、有声化と呼びます。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば「柿」は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
 タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

この特徴は、今回の会話集の話者たちにもかなりよく保たれているようです。例えば、カ行音については、「タガイ」（高い）、「オギデンダナ」（起きているんだな）、「タイグカン」（体育館）、「カゲサセテ」（かけさせて）、「コゴマデ」（ここまで）、また、タ行音については、「アダマ」（頭）、「オレタジ」（私たち）、「アズマレ」（集まれ）、「キーデタラ」（聞いていたら）、「ジシンドギ」（地震のとき）といった例が聞かれます。

ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。それら軽度の有声化音も、文字化資料ではガ行・ダ行の文字で表示してあります。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外の位置にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルとなり、「上げる」と混同してしまいそうです。しかし、「上げる」のほうは「げ」が

鼻濁音、すなわち鼻にかかった濁音（「ヶ°」のように半濁点で表記する）となり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アヶ°ル

で両者の混同は起こりません。このように、「げ」が鼻にかかる現象を鼻音化と言います。

今回の会話集の話者たちもこの特徴を持っています。例えば、「ツナミカ°キタ」（津波が来た）、「ヨンダイク°ライ」（四台くらい）、「スーコ°ク」（すごく）のような発音が聞かれました。ただし、鼻にかかっているのかいないのか微妙で、聞き取りの難しいケースも多くありました。そうした問題を含むものの、文字化資料では一律に鼻濁音で表記してあります。

以上のガ行に加えて、同じようにダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します）。

例) ダ行：肌 → ハンダ
 ザ行：風 → カンゼ
 バ行：首 → クンビ

以前は、仙台市でもこうした発音が行われていたものと思われませんが、現在は衰微が著しく、今回の話者たちからはほとんど聞かれませんでした。

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞これは「口蓋化」と呼ばれる現象の一種です。この場合の口蓋化とは、キの発音をするときに、舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を指します。

例) 機械（きかい） → チカイ
 救急車（きゅうきゅうしゃ） → チューチューシャ
 今日（きょう） → チョー

上の例では、「チ」と表記しましたが、仙台では完全にチになるのではなく、キのあとにシの発音を添えるような微妙な音になることが多いようです。今回の会話集の話者たちにもこの特徴は見られ、「チタンダヨネ」（来たんだよね）、「チニスッコト」（気にすること）のような例が聞かれます。しかし、概してこの傾向は強くは現れていません。

【母音】

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言います。宮城県ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」のように発音され、これらは区別がありません。いわゆるズーズー弁と呼ばれる所以です。

例) 獅子（しし）、煤（すす）、寿司（すし） → すべてスス
知事（ちじ）、地図（ちず）、辻（つじ） → すべてツズ

今回の会話集の話者たちからも、「ナントモナイスネ」（なんともないしね）などの発音が聞かれました。

ただし、現在ではこの中舌化の特徴も弱まりつつあり、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、という段階に入りつつあります。共通語とあまり変わらない発音が聞かれることも多くなっています。

¶ アクセント

仙台市は、アクセントの型がない無型アクセント地域である。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています（＝型がある）、それによって単語の区別がつかますが、無型アクセント地域では高低が決まっていない（＝型がない）ため、区別されません。

共通語話者がこの無型アクセントの発音の地域のことばを聞くと、文が平らでのっぺりしているとか、区切れがわからず意味が取りにくいとの印象を受けるようです。

一方で、アクセントがないためか、同じ無型アクセント地域の福島県や茨城県などに似た独特の音調が聞かれます。

Ⅱ 文 法

【格助詞】

▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主語を表す助詞や、「を」のような目的語を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることがよく見られます。特に、「を」にあたる助詞に顕著です。

例) 主語 : 俺 行く (俺が行く)
目的語: 酒 飲む (酒を飲む)

今回の会話集の話者たちからも、「センキョジムショ テツダッテテネ」(選挙事務所を手伝ってね)、「ジムショ ユレテデ」(事務所が揺れていて)、「ツナミクンノガナー」(津波が来るのかなあ)などのように、「が」や「を」を使わない発話が聞かれました。

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところも多くあります。

例) ドコサダガ イグッテ (どこへだか行くって)
ウジサ カエッテキタ (家に帰ってきた)
ソコサ オイデデー (そこへ置いておいて)
リョーリサツカッテケサイン (料理に使ってください)

ただし、「サ」は共通語の「に」ほど広い意味をもっているわけではありません。「ココサ オッカラナ」(ここに置くからな)のように「サ」を使った発話例が聞かれる一方、「ココニ オイドッカラネ」(ここに置いておくからね)のように「サ」を使わず「ニ」を用いた発話例もあります。仙台市では、もともと「～サ 居る」「～サ ある」という言い方はしませんでした。しだいに、そのような言い方をすることになってきたものと考えられます。

【接続助詞】

▼「ガラ」

共通語の「から」に当たる接続助詞（順接既定条件）に「ガラ」がある。

☞「ガラ」の用法は共通語の「から」とほぼ同じと思われます。共通語同様、次のように、終助詞的に使用されることもあります。

例) デンワワー トニカゲー ツナガラナイガラー (電話はとにかくつながらないから)

【接続詞】

▼「ンダカラ」「ンデ」

共通語の「だから」にあたる「ンダカラ」、「それでは」にあたる「ンデ」などが用いられる。

例) ンダカラ イタカラ ヨカッタケドネ (だから[家に]いたから良かったけどね)
ンデ ココサ オッカラナ (それではここに置くからね)

☞今回の会話集には現れていませんが、「ンダガラ (ホンダガラ、ダガラ)」は、単独で相づちのようにも使われ、相手の言ったことへの強い同意・共感を表す用法もあります。

例) ー今日、暑イゴド (今日は暑いね)
ーンダガラ ((本当に) そうだね)

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」(推量)や「～しよう」(意志)に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だべ (明日雨だろう) <推量>
明日は早く起きッペ (明日は早く起きよう) <意志>

お祭り、お前も行くべ？（お祭り、お前も行くだろう？） <確認>
みんなでがんばッペ（みんなでがんばろう） <勧誘>

今回の会話集では、「デンワワ ツージナイベシー」（電話は通じないだろうし）のように推量の用法が見られます。

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。

例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ
(私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく（この場合は「タ」が用いられます）、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使われやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる？

②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。

あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田（2011）より引用>

今回の会話集の話者たちからも、「イダヨー」（居るよ）などの発話が聞かれました。

【終助詞】

▼「チャ」

共通語の「だろ」「じゃない(か)」「よね」などにあたる終助詞として「チャ」が用いられる。

☞相手が知っているはずだ、当然わかるはずだ、と思う事柄を示し、相手に確認させる機能があります。今回の会話集では、次のような例が聞かれます。

例) コワサナイヨーニッテ ユッタッチャー。(壊さないようにって言ったでしょ。)
イッショニ タベッチャ。(一緒に食べるでしょ?)

【敬語】

▼「ス」「ガス」「イン」「サイン」

敬意を表す形式として「ス」「ガス」「イン」「サイン」などがある。

☞共通語との対応を考えると、大まかに言って、「ス」は「です」「ます」、「ガス」は「です」などにあたります。「イン」「サイン」は相手に丁寧に働きかける言い方で、柔らかい印象を与えます。

例) スコシ イップク シナイスカ (少しひと休みしませんか?)
ヤンネート ダメダガラ ヤンダケデガスー (やらないとだめだからやるだけです)
オイデガイン (置いていってください)
ツカワイン (お使いなさい)
カラダ キーツケサインヨ (身体に気をつけなさいよ)
ツカッテ ケサインヤ (使ってくださいよ)

【参考文献】

- 加藤正信 (1969) 「東北方言概論」『言語生活』210
- 加藤正信 (1992) 「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
- 国立国語研究所編 (1981) 『国立国語研究所資料集10 方言談話資料5 岩手・宮城・千葉・静岡』秀英出版
- 小林隆編 (2000) 『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤亨 (1982) 「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 竹田晃子 (2011) 「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 東北大学方言研究センター (2012) 『方言を救う、方言で救うー3.11被災地からの提言ー』ひつじ書房